

がなければ晴になるといわれています。単純なことのようですが、永い間の観察によつて、その山の変化と天候の変化とが一致することを発見したのでしよう。この櫓もそのために作られたかも知れませんが、それはあくまで私の憶測であることは云うまでもありません。とにかく、その日は素晴らしく晴れていて勿論南昌山にも雲はかかっています。

4

さんさんと降り注ぐ、そういつても間違いはあるまいと思えるほど、六月の太陽は惜しみなく地上に光を降りそそいでいました。まだすつかりは青くなりきれないような東北の六月ですが、木も草も若い生命を燃やしているさかりのようです。

どこからか郭公の啼く声が聞えてきます。櫓があるといつては車から降り、郭公が啼くといつては車を停めていたのでは、いつになつたら浜民へつくかわかりません。でも、日頃郭公の声をきかない私にとつては、タイヤの音さえ邪魔になるような気がしてなりません。そんなわけで、つい車から降りて、真白な巻煙草を口にくわえるのでした。

それにしても、郭公はなんと美しい声で啼くものでしょう。カツコー、カツコーと字で書いてしまえばそれまでですが、その声は近くのようにも、遠くでもあるような気がする不思議な響をもっています。カツコーの声を聞いてみると、藁葺屋根の

農家も、森も鳥も、みんな非常に低い位置にへばりついてしまつたのではないかと、う錯覚に陥入るのです。或いは普通のな感じ方で、所詮は私だけのものかも知れませんが、それほどカツコーの声は低い所から水平に、なにもにも妨げられないように澄んだ声を私の耳まで送ってくるのです。実際望遠鏡でその姿をみられたらと、甲斐なきことを悔んだことでした。どうなんでしょう。カツコーは静寂を破り静寂をより静寂にすることを快感としているのではないのでしょうか。そんな勝手な想像を私は楽しんでいました。再び車に乗つても、いく先々、それこそ到る所でカツコー、カツコーと啼く声に慰められたことです。

郭公といえは、啄木にとつてもカツコーカツコーと啼く声は、想い出多きものであつたようです。

閑古鳥

浜民村の山荘をめぐる林のあかつきなつかし

こんな歌を私は覚えています。そうです。郭公は夏になると日本に渡つてくる渡鳥なのです。もちろん啄木の歌つた閑古鳥は郭公のことです。

私たちは川又というところで陸羽街道に別れ、常光寺へいくために小さな山を越えて赤坂に入りましたが、藤森君の話によりますと、このぐらゐの山道でも冬は通れないほど雪に埋れてしまふそうです。それに付けても何と云い空でしょう。道が狭ばま

るほどに若葉の臭いがむせかえるように漂つてくるのです。

5

玉山村役場の玉山支所が目安でした。隣りに農協兼雑貨屋があるだけの淋しいところですが、この支所の前の横道に入りますと、まもなく常光寺です。サイクリング車ですから、そんなに急いだつもりはありませんが、村人の教えてくれた時間よりも早く五分もかからなかつたでしょう。

寺は大きな杉の木立を前に、小山を背にして、日当りのよい小さな庭をもつていました。幼な児たちが多勢遊んでいましたが、私が杉の木の前でカメラを構えますと、みんな集つてきて、一本杉の下に並んでしまいました。あまりの可愛さにそのまま幼な子たちを入れてシャッターボタンを押して、こんどは啄木生誕の地と刻んだ石碑に場所を移しますと、また並びます。これには一寸まいりましたが、一人だけカメラの前に並ばない男の子がいます。まだ口もよくきけないほどの幼な児のことですから、どういわけかは私にはわかりませんでし

浜民村の共同井戸



たが、かわいそうだと思つて、皆の中へ連れていつてやりましたが、一番隅つこで孤立していました。人一倍ふるさとを愛し、しかも村の人々に追われなければならなかつた啄木が、この孤立した子供に覗きみられるような気がしましたが、あわててそんな考えを打ちこわしました。

常光寺は啄木の生れた寺だそうです。ところが啄木はほとんどこの寺を懐しんでいないなかつたようですし、啄木研究書を読み

しても、この土地の人もいまままで啄木をか  
えりみてこなかつたようです。ところが、  
いまはこの寺の庭の隅に、大きな石碑が建  
つていて「啄木生誕の地」と鮮やかに刻ん  
であります。私はこの寺を訪ねてみて、石  
碑の大きさに反撥を感じましたが、感傷で  
しょうか？ お笑いになつても結構です。

本堂は粗末な小さなもので、右手の庫裡  
もまたまけず劣らずの粗末さでした。庫裡  
の縁側に日向ぼっこをしている乙女が二人  
さつきから私たちを見ていました。おそら  
くこの乙女たちに聞いても満足な話はきけ  
ないと思いましたが、黙つて帰るのも気ま  
づく思い、啄木について問うてみました。  
ところが一人は何も知りませんでした。も  
う一人は、「このお寺で生まれたさうで  
す」と答えただけで、あとのことは知りま  
せんといつていました。

「あなた方はこの寺の方ですか？」  
そんな問いにも首を横にふつて  
「保母です」

と答えただけです。よく聞いてみますと  
農繁期なので、この寺を臨時保育園にして  
いるのだと言葉少なに説明してくれました  
が、どういうわけか、だんだん孤独になつ  
ていく自分に、気がつかないわけにはいき  
ませんでした。啄木の故郷は波民であり、  
今では玉川村字波民であつても、啄木の友  
は、もつと遠くに散らばつていゝような気  
がしてなりませんでした。



啄木が神童の名をほしいまに育つた宝徳寺

ラクターは何のた  
めにこんな所を走  
つてゐるのだろう  
か？ そんな疑問  
を持つて藤村君に  
訊いてみました。  
彼の答えを要約す  
ると大体次のよう  
なことになるま  
す。

この道は下閉井  
郡といつて日本の  
チベットといわれ  
る山奥に通じてい  
ますが、その山奥  
にダムをたくさん  
作つてゐるとのこ  
とです。彼は東北  
電力の人なので、  
いろいろと詳しい  
話をしてくれまし  
たが、興味のあつ  
たことは下閉井郡  
という僻地の話で  
す。大変なところ  
で、先生もそこへ

寺を出るとき、大きなトラクターが降り  
ていきました。私達はトラクターをどこで  
追いこそうかと何辺か近寄りましたが、道  
が狭いので、しばらくの間は後塵を拝する  
という愛目にあいました。ところでこのト  
ラクターは、後任希望者がないうまに、骨  
をうずめるまで働かねばならないことにな  
るさうです。そういう己の行先を悲しんで  
自殺した先生もあるとか。日本の歴史が自  
然の条件と為政者の手ぬかりで、どんなに

ひどいピツコな発展をとげていることが、  
話を聞いただけでも、ぞつとすることが、  
たくさんあるようです。

そんな話をしながら、いく曲りも道を曲  
りながら走つていきますと、岩手山がうん  
と近づいてきました。道のむきによつては  
姫神山もみえます。啄木が愛してやまな  
かつた山々は、いまも岩手は男性的に女神は  
女性的に对称的な姿をみせてゐるのです。  
最後の登りを登りつめました。頬かぶりし  
て杖をついたお爺さんと、大きな荷を背負  
つた中年も半ばすぎた婦人にゆき会いまし  
た。なんとこのことのない出会いでした  
が、何か啄木の時代に連れもどされたよう  
な感じがして写真にとつておきました。

「啄木が前代未聞の学童ストライキを  
やつた丘はこのへんじやないでしょう  
か」

藤森君にそんな問いを發しましたが、そ  
うらしいですわという程度の答えて、彼も  
よく知らないようでした。私たち二人はそ  
れでも満足して、代用教員啄木の血のわき  
あがる様を想像しながら、足元のスロープ  
と岩手山とを眺めていました。

ふるさとに入りて先づ心傷むかな  
道広くなり  
橋もあたらし

波民の部落へ入つたとき、この歌の実感  
が、鋭すぎるほどに私を襲つてきました。  
なんと広い道でしょう。啄木の夢にみたふ

るさと波民と、私の勝手なイメージである

おもいで川  
明朝で誰にでも



眼の下に北上川と鶴飼橋がみえ、前方は岩  
手山、后は姫神山がみんな一べんに望める  
丘です。

るとと浪民と、私の勝手なイメージである浪民とは決して同じである筈がありません。だのに、この道巾には私も失望せざるを得ませんでした。

南から入りましたので、陸羽街道の坂を登りつめたところが浪民です。家並はそう長くないことは、一直線の道のむこうが、空とくつついていることでもわかります。

昔の話に、太名行列というのがありません。絵でも御覧になったことがあるかも知れませんが、「下にい——下にい」と先払いをして大名の行列がいくと、通行する農民、町人は土下坐してこれを除けたそうです。私たちの祖先のこういう悲しい姿に、この浪民の家並がそっくりなのです。べらぼうに広い道の両脇に、二階家でも屋根がふかぶかとかぶつて低くみえる家々が、ベシヤンコなかつこうをしてへばりついているのです。

この道は浪民の意思で拓がった道ではありません。両脇へ払いのけられるようにして、退くのを余儀なくされたのではありません。東京青森を結ぶ国道のために——。おそらく浪民に何らかのイメージを持つ人は、この道の広さに、啄木の歌をあらためて思いだすのではないのでしょうか。

まもなく斉藤という家が右側にあります。啄木はこの家に下宿して浪民小学校の代用教員をやっていたそうです。この家の玄關の扉の下に啄木歌碑が立っています。

おもしろい山

おもしろい山

おもしろい山

明朝で誰にでも読める石碑ですがその書体が或いは啄木を偲ばせるとするならば、この家並の古さと暗さは、啄木に冷たかつた村人を想い出させてもいるようです。歌碑と部落とのつながりが妙にちぐはぐに思えてなりません。

道端には二つばかり井戸があり、何軒か共同で使うのでしょうか。おんな衆が喋りながらすすぎものをしていました。学童が水を飲んで駆け去りました。この井戸をみると、やつと私は落ち着いてきました。部落の人の呼息にふれているという安心感が湧いてくるのです。

ただ、啄木遺跡を案内する白ペンキ塗の導標は、妙にそらそらしくて一々入つていく気になりませんでした。町をゆつくり走り、そして雑貨屋でパンとカン詰を買つて

風の吹きとおしのよさそうな丘でした。浪民の家並の外れを左に折れるとすぐ、啄木の歌碑のある丘に出ることができました。



啄木誕生の寺常德寺、今は臨時保育園になつている

眼下の下に北上川と鶴飼橋がみえ、前方は岩手山、后は姫神山がみんないへんに望める丘です。

やわらかに柳あをめる  
北上の岸辺目に見ゆ  
泣けとごとくに

随分大きな歌碑です。歌を刻んだ部分は滑らかに長方形に凹んでいて、そこに「やわらかに柳あをめる——」と明朝体で彫られています。やや西向に立つ碑です。六月の太陽は高く、そして真上にきていたので字だけが深く陰になつていて、歌碑を一層美しいものにしていました。

私たちは歌碑の前の小さな松の下に日影を求めて、握り飯やらパンやら牛の大豆煮の缶詰などを掲げて食事しました。藤森君は野球の試合のために浪民へ来たことがありますという話をしていました。握り飯をかじりながら眼を下におろしますと、北上川が、それはひどく濁つて流れていました。ここまで来る道で、たしか川又の手前でしたが、やはりひどく濁つた北上の流れをみました。それは異様な感じの茶褐色の流れです。

「これは松尾鉾山の鉾毒のために濁っているのです。ここから一寸先に、北上の支流で松川という川が入ってくるのですが、その松川の上流に鉾山があります。ですから、好摩までいけば北上は美しい流れになります」

藤森君はそういいながら、私に岸辺に覆いかぶさるようにして生い繁つているたく